

二〇二四年度 一般選抜 学力検査(国語)

国語総合 (近代以降の文章) ・ 現代文B

解答番号

1

〜

29

一 次の文章を読んで、後の問い(問1～問9)に答えなさい。

「現代」とは何かを考えるための入り口として、「冷戦史観」と呼ぶ<sup>(1)</sup>る見方を検討してみたい。それは、「冷戦後」の世界を「冷戦期」の世界と分けて考え、冷戦の終結が「現代」をもたらしたのだとする見方である。

一見、わかりやすい。第二次大戦後長らく続いた冷戦が一九九〇年前後に終結したのは、たしかに重要な史実である。

**A**、それでは「冷戦後」とは何を意味するのか。それは戦争ではなく平和の時代だといえるのか。仮に平和の時代といえるとしても、その「平和」とはどのようなものなのか。十九世紀の平和とはどう異なっているのかなど、いろいろな問題が出てくる。

もっと根本的には、世界の歴史を戦争の有無によつて時代区分するのは、はたして適当な見方なのだろうか。それは「戦争決定論的史観」あるいは「強大国中心史観」ともいわれるべきものであるが、<sup>(注)</sup>ミュンヘンの学会でも見られたように、「戦争」といっても実際の戦闘だけでなく、その前後の社会、文化なども考慮に入れなければバランスのとれた歴史理解にはならない。

冷戦の時代も同様である。仮に一九四〇年代末からソ連が崩壊した一九九一年までを冷戦の時期だとしても、この半世紀近く<sup>(1)</sup>のあいだにはそのような簡単な枠組みには入りきらない事象が山ほどあるのだ。

たとえば、植民地支配の終焉<sup>しゅうえん</sup>がある。これは敗戦国の日本、ドイツ、イタリアだけでなく、戦勝国のイギリス、フランス、オランダ、米国などについてもいえることだが、フィリピンが独立した一九四六年やインド、パキスタンが独立した一九四七年には、米ソの対立はまだ決定的なものにはなっていなかった。つまり、**X**。

その後、一九五〇年代、六〇年代を通じた植民地の解放や「新興国家」の形成は、歴史上きわめて画期的な出来事であった。そのすべてを冷戦の枠組みのなかで理解することはできない。そして、長期的に見れば、アジア・アフリカ・中近東などの独立国家による「第三世界」の出現のほうが、「強大国」間の対決より重要な現象だったともいえる。

**B**、「冷戦後」などといった時代区分は、ほとんど何も意味を持っていないことになる。

<sup>(2)</sup> しかも興味深いことに、新興国家の国づくりの基盤となった「発展」(ディベロップメント)という概念は、米ソ冷戦よりもずっと早く、一九三〇年代には国際連盟などで常識化していた、という事実が最近の研究によって明らかにされている。

そして、第二次大戦というかつてない規模の破壊と悲劇を越えた後では、世界平和の回復、そのための経済の発展、福祉の増進を意味する「発展」の概念は、米ソ冷戦に関してよく使われた「脅威の均衡」や「封じ込め」といった常套句じょうとうくよりもはるかに影響力のあるものだった。

同じようなことは、「冷戦後」は米国が「世界唯一の超大国」になったのだとか、現在は「米中二国の覇権争い」の時代だ、とするような見方についてもいえる。これらはいずれも地政学的、現実主義的な解釈である。

しかし、それが現代史の理解に役立たないことは、たとえば米中二国が世界第一、第二の経済大国として **Y** 的な状態にあることを考えてみればわかる。

さらに言えば、米中関係といつても、国家や政府だけではなく、多数のアメリカ人、中国人によって織りなされているものであることを認識すべきである。貿易のみならず金融、観光、教育などの面で彼らは密接なつながりを作っている。

**C** 「アメリカ人」のなかには百万を超える中国人が含まれているのだ。簡単に国単位で米中関係を理解することなどできない。経済、社会、文化などの面において米国と中国とは多くのものを共有している。そのような現象を理解するうえで、「冷戦後」といった時代区分は無意味であろう。

あるいはまた、「冷戦後」の世界ではテロリズムの勢力が決定的な影響力を持つようになったという言い方もしばしばなされる。二〇〇一年九月十一日のアルカイダによるニューヨーク、ワシントン同時テロ事件はシンコクアであり、その後、中近東、東南アジアなどでもテロ事件があつたを絶たない。しかしテロだけに注目していると、同時に存在する多くの事件や動きを軽視することになりかねない。

たとえば9・11の発生した二〇〇一年は、国連によって「文明間の対話年」と定められた年でもある。文明の相互理解、それはユネスコが長い間にわたって推進してきたプロジェクトである。しかも同じような活動は、一九二〇～三〇年代を通じて国際連盟内の知的協力委員会によっても行われていた。つまり、テロリズムに比べればはるかに幅の広い活動であり、それは9・11によっても打撃を受けなかったのみならず、一層活発になるのである。このような現象を視野に入れずに現代の世界を語ることはできない。

このように見てくると、「現代」といつても実に多くの動きや流れがあり、そのうちの一部をとらえてその歴史をたどるのが「現代史」なのだ、ということとはできないことがわかる。

それではどうするか。

「現代的」な動きにしても、必ずしも最近出現したわけではないことは、「発展」や「文明間の対話」という概念がかなり以前から存在していることからわかる。

つまり歴史には同時進行中の多くの流れがあり、そのなかのいくつかは「現代世界」の形成に寄与している、いわば未来志向のものだが、多くは過去のイサンイサンにすぎないということである。この両者の区別を明確にすることが、現代史研究の出発点でもある。

そのためにはどうしたらよいのか。何らかの方法論的な枠組みが必要となる。歴史を見通す枠組みを作って、そのなかでより「現代的」な現象とそうでないものを選び分ける。そして、現代的な現象がどのようにして現在まで流れてきたのかを考える。そのような作業をすることによって、「現代」の起源、つまり世界の歴史が「現代」に入ったのはいつごろなのかを探る。本書の意図するものはそのようなことである。

この二、三十年の間、特に一九九〇年代以降、歴史研究の動向には大きな変化が見られた。端的に言えば、従来、国家中心の歴史が研究の対象だったのに対し、最近ではもっと広範囲（大西洋、太平洋など）の枠組み、あるいは世界全体を視野に入れた著

述が多くなっているのである。

私はこのことについて二〇一二年に小冊をイギリスで出版したり、世界各地の歴史学者の集まりで意見を交換したりしてきたので、それが個人的な印象ではなく、多くの学者の考えでもあると思う。

私は一九五三年に米国の大学に入学して以来六十年余り、歴史を勉強してきた。大学や大学院ではイギリス、米国、中国といった「国家」の枠組みの中で歴史をとらえていた。その後、一九八〇年代末期までは諸国間の関係（いわゆる外交史、国際関係史）を専門に研究したり教えたりしたが、国際関係とはいってもその根底は主権国家で、とくに「強大国」と呼ばれるものが中心だった。

私がおそのような枠組みを外れて、国境を越えた人々のかかわりや、全世界、全人類の関心事などを視野に入れるようになったのは比較的最近のことである。つまり私自身の歴史研究も学界全体のフウチヨウ<sup>(7)</sup>を反映して、一九九〇年代以降に新しい段階に入ったのだといっている。

この視野は英語でグローバル、トランスナショナルという言葉で表現されている。国家ではなく地球（グローブ）を枠組みとする、そして国家間（インターナショナル）の関係ではなく、国境を越えたトランスナショナルなつながりに注目する、ということである。

グローバル、そしてトランスナショナルな視野での歴史とは何か。

この両者に共通しているのは、一つには世界全体の動きをとらえようとする姿勢、二つ目は国や文化などの境界を越えた人間同士のつながりをたどるということ、そして三つ目は同じ地球に生息する自然環境も歴史研究の視野に入れるということである。

これらの視点は、従来の歴史研究とは異なった問題意識を提供するものであり、歴史としての現代を考えるうえでも非常に参考になるので、多少詳しく説明してみたい。<sup>(4)</sup>

まず、世界全体の枠組みでとらえてこそ歴史があるのだ、という意識である。もちろん、古代からの人類の歴史は世界中に住

む人間の歴史であり、そのこと自体は目新しい見方ではない。しかし国別の歴史（日本史、中国史、アメリカ史……）は世界の歴史とはいえない。極言すれば、人類の歴史は一つしか存在しないのである。

もつとも、人類すべての歴史といっても、各地のできごとを漫然と羅列したのでは意味をなさない。地球に住む人々のつながり——世界中に網羅されているネットワーク、出会い、かかわり合い、共有される思想や態度、あるいは摩擦など——を視野に入れるということである。

これがグローバル史観の二つ目の特徴で、ただ漠然と人類を考えるとではなく、各地各社会の人々が相互にコネクト、そしてリコネクトする（つながりあいを繰り返す）過程をたどる。言い換えれば、過去の歴史を人間同士、社会同士のつながりを通して理解する。

そして三つ目には、地球に住むのは人間だけではなく、大気も海洋も動植物も「生態系」（エコシステム）を形成している。あり、したがって「環境史」も歴史研究の対象となる、という意識である。人類を養ってきたエコシステム、人間による自然破壊、あるいは両者間の共存共栄の試みなどは、「惑星史」とでも呼びうるかもしれない。これは人間同士、あるいは国家間の関係などに優るとも劣らない重要性を持つとされる。

<sup>(5)</sup> このような特徴を持ったグローバル史観をとおして過去を振り返ると、従来とは違った歴史が見えてくるはずである。そしてこの視野での歴史は「現代」を考えるうえでも極めて示唆に富んでいるのではないだろうか。

（入江昭『歴史家が見る現代世界』による。）

（注）ミュンヘンの学会——2013年に筆者が参加した現代史研究所主催の学会のこと。

問1 傍線部(ア)と(ウ)と同じ漢字を含む熟語を、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。

解答番号は、  
1  
2  
3

(配点6点)

(ア) シン|コク  
1

- ① シツ|コクの闇の中を歩く。
- ② チョウ|ウコクの展覧会に行く。
- ③ ヒコ|クの証言を聞く。
- ④ 今年の夏は記録的なコク|シヨであつた。
- ⑤ コク|モツを主食とする。

(イ) イ|サン  
2

- ① イ|ジンの伝記を読む。
- ② イ|マで一家団らんする。
- ③ 事件のケイ|イを聞く。
- ④ 事故のイ|ゾクを支援する。
- ⑤ 人口のスィ|イを調べる。

(ウ) フウ|チヨウ  
3

- ① 海面のチヨウ|ウイを測る。
- ② 姉はシュツ|チヨウが多い。
- ③ 背任行為でチヨウ|ウカイ処分になる。
- ④ 好転のゼン|チヨウを示す。
- ⑤ 窓からのチヨウ|ウボウを楽しむ。

## 問2

空欄

A

く

C

を補うのに最も適当なものを、次の①～⑧の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。ただし、同じ番号は一度しか選べない。解答番号は、A **4**、B **5**、C **6**。

(配点6点)

- |   |     |   |       |   |      |   |      |
|---|-----|---|-------|---|------|---|------|
| ① | また  | ② | したがって | ③ | とはいえ | ④ | しかも  |
| ⑤ | そこで | ⑥ | しかし   | ⑦ | なぜなら | ⑧ | なおさら |

問3

空欄

X

解答番号は、

7

・  
8

Y を補うのに最も適当なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。

(配点6点)

X

7

- ① 冷戦とは関係がない
- ② 冷戦の糸口といえる
- ③ 冷戦のきっかけだった
- ④ 冷戦とは並存している
- ⑤ 冷戦は幻に過ぎない

Y

8

- ① 過当競争
- ② 一心同体
- ③ 対立関係
- ④ 相互依存
- ⑤ 一触即発

## 問4

傍線部(1)「『冷戦史観』と呼びうる見方を検討してみたい」とあるが、「冷戦史観」について筆者はどのようにとらえているか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は、9。(配点5点)

- ① 冷戦の終結が現代という時代をもたらしたという見方であり、長い冷戦を経て冷戦後に訪れた平和を重視する理想主義的なものである。
- ② 冷戦期と冷戦後の世界を分けて考える見方であり、実際の戦争と冷戦を同じとみなして世界を戦勝国と敗戦国の関係から見るものである。
- ③ 歴史を冷戦の有無によって時代区分する見方であり、前後の社会や文化を視野に入れずに現在の政治を正確にとらえるものである。
- ④ 世界の歴史を冷戦の時代で区分してとらえる見方であり、植民地支配の終焉によって世界に平和をもたらしたと考えるものである。
- ⑤ 冷戦期と冷戦後の時代に区切ってとらえる見方であり、その前後にわたる世界全体の社会や文化をとらえていない偏ったものである。

## 問5

傍線部②「しかも興味深いことに」とあるが、何が、どういう点で「興味深い」と筆者は述べているか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は、10。

(配点5点)

① 「発展」という概念が、一九五〇年代、六〇年代を通じた植民地の解放や新興国家の形成という画期的で重要な出来事につながった点。

② 「発展」の概念が、冷戦以前から存在していたうえに、世界平和の回復のための発展という意味で冷戦よりも大きな影響を与えている点。

③ 「発展」という概念が、冷戦より早く存在したのに加えて、冷戦に関してよく使われた言葉よりも米ソ二国に対して影響力を持つようになった点。

④ 「発展」の概念が、冷戦よりもはるか前に国際連盟により提唱されていたという事実が最近の研究によって明らかになった点。

⑤ 「発展」の概念が、冷戦以前に常識化しており、第二次大戦の破壊と悲劇を越えた後に経済の発展、福祉の増進という意味に変化した点。

## 問6

傍線部③「9・11の発生した二〇〇一年は、国連によって『文明間の対話年』と定められた年でもある」とあるが、この話題によつて筆者はどのようなことを述べようとしているか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は、

11。

(配点5点)

- ① 世界には大きな事件以外にも同時に存在する動きや活動がなされており、被害をもたらす重大事件だけを重視すると民衆の日常生活を見逃してしまうということ。
- ② 米国で同時テロ事件が発生したのちにもテロは続いたことを受け、国連は世界中の人々に異なる文明、文化を越えて平和をとりもどそうと呼びかけたということ。
- ③ 世界には長きにわたつて同時進行する重大な事件や活動が幅広く存在しており、それらをないがしろにして現代にいたる歴史をとらえることはできないということ。
- ④ 冷戦後の世界ではテロリズムの勢力が大きな影響力を持ち、テロ事件があとを絶たなかつたので、それら多くの事件や動きを軽視することはできないということ。
- ⑤ 世界全体を見ると多くの動きや流れが時空を越えて幅広く存在しており、そうした動きは大きな被害による打撃を受けることでより一層活発化するということ。

## 問7

傍線部(4)「従来の歴史研究」とあるが、どういうものか。本文全体を踏まえた説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は、12。

(配点5点)

- ① 世界の中で主だった国ごとの時代的な変遷をたどりながら、国や時代の違いを越えて共通する人々のあり方を探究する歴史研究。
- ② 冷戦時代における米ソ間の関係に着目し、二つの国家の枠組みを地政学的に分析することで現代の歴史を考えようとする歴史研究。
- ③ 強大国を軸に国家の枠組みをとらえ、その諸国間の戦争を地政学的に分析することで人類全体の平和を考えようとする歴史研究。
- ④ 世界の中で主だった国を対象に国家の枠組みの中で歴史をとらえ、戦争や外交としての国家間の関係を解釈しようとする歴史研究。
- ⑤ 戦争の有無によって世界の時代を区分し、それぞれの時代における国境を越えた人々の関係や関心事をとらえようとする歴史研究。

## 問8

傍線部(5)「このような特徴を持ったグローバル史観」とあるが、どのような考え方か。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は、13。(配点6点)

- ① 国ごとの出来事を越えた広範囲の枠組みを視野に入れ、時代を越えて長い間存続してきた出来事や関心事を理解することで、人類すべてに共有される歴史を生み出そうという考え方。
- ② 世界全体として人間以外の自然環境に目を向け、これまでの人間による自然破壊を反省し、一つのエコシステムとして世界のあり方をたどることで地球の環境を守ろうという考え方。
- ③ 世界全体の動きを把握するとともに、国や文化などの境界を越えた社会や人間同士のつながりを理解し、さらに地球の自然環境をも視野に入れて歴史をとらえようという考え方。
- ④ 過去から現代にいたるまでの世界全体を視野に入れ、これまで人間がもたらした自然破壊の状況を明らかにすることで、垣根を越えた人と人との関係性を探ろうという考え方。
- ⑤ 国ごとの違いを越えた世界全体の動きを視野に入れ、同時に存在する人間同士のつながりを重視して地球規模の歴史を語ることで、従来の国家の枠組みをとらえ直そうという考え方。

問9

本文の内容に合致するものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は、

14。

(配点6点)

- ① 米ソが対立したかつての冷戦はたしかに重要な史実であるが、現代の歴史研究においては何も意味を持っていない。
- ② 九〇年代頃からの歴史研究者は、戦争から国家のあり方へと視野を広げ、世界全体の動きをとらえようとしている。
- ③ 現代史研究は、過去に同時進行したさまざまな現象の中から現代世界につながる未来志向の現象を見極める必要がある。
- ④ 地政学的、現実主義的な解釈は現代史の理解には役に立たないので、十九世紀以前の歴史に限定されるべきである。
- ⑤ 歴史研究はこの数十年間で、戦争を中心に見る歴史観から自然環境を軸に世界全体を見る歴史観へと転換を遂げた。

二 次の文章を読んで、後の問い(問1～問9)に答えなさい。

最近、留学生が答案にこんなことを書いてくれました。

自分のいた国のことには、講義で語られていたような「聞く／聴く」[hear\listen]<sup>(注1)</sup>「entendre\écouter」<sup>(注2)</sup>の区別がない。でも、その違いは「ところ」にあるとわかった。そして、いま、自分は何であれ、聴こうとしている、「特に、母国の家族と通話しているうちにたまに聞こえているうちのネコの「ニャー」も、聴こうとしています」と。

わたしは「ところ」という語をつかうことが、滅多にありません。意識的につかわないようにしていると書いていい。学生は自らの解釈でこの語をつかったのかとおもいますが、<sup>(1)</sup>自らの語っていることがこういうふうを意識化され、身体化されることこそ、講義や演習といったかたちで、対面してはなしをする意味が、効果があるようにおもいます。それは画面上や本で文字を読むのとは違うものでしょう。

留学生は電話で家族とはなしをしている。実家には猫が飼われている。その猫はきつと名前があるでしょう。猫は、学生からの電話だと知ってか知らずか、もしかしたら単にごはんの時間になったから催促しているだけかもしれないけれど、鳴く。わたしはまた、学生が「ニャー」と書いていることにもうごかされていました。ごくふつうにつかうオノマトペです。でも、言語によつてオノマトペは違う。<sup>(2)</sup>そのオノマトペはただそれだけで単独にあるのではなく、言語体系そのもののなかでこそ生まれま

す。たぶん学生は韓国から来ているのですが、むこうではきつとニャーを「야옹(ヤオン yaeong)」と言っていたはず。犬猫の鳴き声は英語でもフランス語でも比較的すぐおぼえられるし、学生にとつて「ニャー」は外国語としてさほど違和感がなかったかもしれない。でも、です。家族の誰も飼った猫の鳴き声を「ニャー」とは聞いていないし、そう表すことはない。そうした文脈のなかで、猫が声をだす、それをこうしたことばで、電話で海を隔てた家族とはなしていたこととつつかつていることに、「あたりまえさ」に、感じるものがあつたのです。

聞くこと聴くについて、よく話をします。先に引いたように、英語の「hear\listen」、フランス語の「entendre\écouter」とあわせて対比したり、も多い。

先の留学生のことばを借りてみるなら、それぞれの語では「こころ」のありよう、集中度といったものが違っていることになるでしょうか。音楽を聴く、といいます。散漫な「聞く」ではなく、ほかののではなく、これを聴く、というふうには。まわりはざわわわしているけれど、「わたしの声を聴いて」「Listen to me」「Écoutez-moi」というときにはほかの音は **X** し、そうしなければなりません。

いまの補聴器は性能が良くなって、まわりにあるノイズのなかから必要となる音をクローズアップして聴かせてくれる、ようです。わたしは（まだ）つかったことがないのでよくわかりません。何十年前に、祖父母が持っていたのをあそびで試したことはありますが、**A** 音は大きくなるけれど、すべてが大きくなって、ただうるさい。祖父母はともに、ほとんどつかわなかったのですが。いまはヘッドフォン・ステレオでもノイズ・キャンセリング機能がついていて、聴きたいものこそが聴ける、わけです。

聴きたいものが聴ける。それは、でも、一歩さがると随分勝手にみえます。時と場合によるでしょう。まわりにいろいろな音があるなかに、その聴きたい音がある、はずです。友人の作曲家は、録音物として作品をリリースするとき、その前段階として、自分で音源をいろいろなところで聴いてみる、と言っていました。その場その場によって、おなじ音源は違ったかたちでひびく。おなじ戸外、おなじ室内でも違う。一言で車内といっても、くるまなのか、そのくるまは乗用車なのかバスなのかトラックなのか。路面電車なのかメトロなのか新幹線なのか。数かぎりなく場合は、文脈があります。いまはどこなどでも聴かれる／聞かれるから、とその音楽家、蓮沼<sup>(注3)</sup>執太は言っていたものです。

日常でも聴くと聞くはごくふつうに、特に気にすることなく、使い分けています。ことばより先に行為があるので、それをただあどづけで聴く／聞くとしているだけではあっても、**B**、意識的に「聴く」ことをおこなう。ヘッドフォン・ステレオで、

いつでもどこでも音楽に接することができるから、音楽の環境化が生じ常態化した。<sup>(3)</sup> 作品としてつくられたものにもっと意識的にふれる、ということから「聴く」という語を積極的につかいたい。聴くことに意識的でいたい。スイッチを切り替えるように、いろいろなところで、音楽に、いや、音楽だけではなく、さまざまな音にむけて、耳をかたむけたい。聴きたい。そんなふうに考えたわけです。

ただ、聴くことはおもしろいのか疲れます。そして、集中はつづくものではありません。限度があります。慣れない外国語を介して人と対話している状態を想像してもいいでしょう。そのときはなんとかこなしても、あとでへとへとになってしまふ。それはことばとその直接的な意味だけではなく、そこにあるさまざまなニュアンス、含みや、その人の表情や態度、自分も含めて相互的に相乗的に生じている空気をも全身で「聴いて」いるからです。そんなとき、逆に、いつもは問題なくこなしていることが抜け落ちてしまふかもしれません。とるべきメモとか、気遣いとか、姿勢や服装を整えることとか。

<sup>(4)</sup> 聴く、よりも聞くことをときに強調するべきかもしれない、と考えるようになったのは比較的最近です。ひとつところに耳が、聴覚がむいている聴く、ではなく、もつと全方位的にひらかれている状態としての聞く。むしろぼんやりと聞いている、とでもいうような。ヒヅクな例で申し訳ないですが、スパイとかヒーローとかが視線をむこうにいる敵にしっかりと向けている。ところが、うしろから来たべつの敵に不意をつかれ、窮地にオチイ<sup>(1)</sup>る——というシーンはB級映画に頻出します。集中しているのは大切だ、**C**、それによってこぼれ落ちてしまうことがある。では聴くと聞くを瞬間ごとに切り替えてゆくことはできるでしょうか。そんなことしなくても誰も困りはしません。ただ、聴くと聞くを柔軟に、<sup>(注4)</sup> シームレスに「きく」。聞くよりも聴くほうがたのしいライブやコンサートがあり、まわりにおこっていることや観客・聴き手の雰囲気などもあわせての「きく」もある。いえ、おなじひとつの場においてもこれらの往還がありえたりするし、実際知らず知らずのうちに起こっている。先に記したように、二つの語がそもそも「きく」をシンプルな二項にしまってしまっている言語の杜撰<sup>ずさん</sup>さによっているのですが。

動物——人も動物なので、人以外の、と言ったほうがいいでしょうか——の場合はどうでしょう？ こうしたことばが介在

しないぶん、もっと自在に「きく」ことができているのでしょうか。

聴くと聞く。さらに聞こえてしまうということがあります。これは聞くにつながるものかもしれませんが、わざと分けてみました。一見すると受動的な「聞こえる」のなかに、べつの意味や接続、連想が、また聴くにもつながってくる意志的なものが、はたらいっていないでしょうか。

想おもいとかべているのは、擬声語・擬態語・オノマトペです。そう、先ほどの猫の「ニャー」ともつながってきます。

分厚い『日本語オノマトペ辞典』(小野正弘編、小学館、二〇〇七)をときどきめくったりします。調べるためというよりは気まぐれに、です。このなかに、本編とはべつに付録という扱いで「鳴き声オノマトペ編」という部分が「漢語オノマトペ編」とならんであります。鳥と虫と動物の三つあり、もつとも多いのは鳥。これは驚くことではありません。アヒルやガチョウの「ガーガー」からトビの「ピーヒョロロ」、スズメの「チュンチュン」「ジユクジユク」は誰もがほとんど自動的につかってしまいう語彙でしょう。知らなかったものもあります。ホオジロの「イッピツケージョー(二筆啓上)」とかツバメの「ツクツテムシクツテシブイー(土食つて虫食つて渋い)」などはじめてでした。D、誰もが知っているというよりは、用例は文字に残された文章のなかにあるものなので、書き手ウコユウの使用法とみてもかまわないのでしょうか。

鳥の部の説明のところには「聞きなし」について記されているので引いてみましょう。あまりなじみのないことばかもしれませんが。例をみたら、あ、あれね、とおもわれるはずですよ。

スズメはチュンチュン、カラスはカーというように、言語の音の体系で鳴き声を聞き取り、ことばに表すのが「オノマトペ」である。そのほかに、鳥のさえずりはしばしば既にある人間のことばに置き換えて聞かれ、ことばに表されてきた。これを「聞きなし」といい、よく知られているものに、ホトトギスの「テッペンカケタカ(天辺かけたか)」や「トッキョキョカキョク(特許許可局)」、ウグイスの「ホーホケキョ(法華経)」などがある。

このように、Y のが、聞きなしの特徴である。(五四六頁)

聞きなしの例はさほど多いわけではありません。鳥だけではなく、虫にもわずかに例があります。キリギリスの機織りをあらわす「ギツコンバッタン」、ツクツクボウシが平安時代に「ウツクシヨシ」と聞かれていたというように。

ことを介して、というのは自然ではありません。ただ、自然に対してのひとつのアプローチであり、ひとつの姿勢であり、ひとつの受けいれであるようです。

(小沼純一『音楽に自然を聴く』による。)

(注1) entendre — フランス語で「聞く」だが、「耳にする」「聞こえている」という受動的な意味。

(注2) écouter — フランス語で「聞く」だが、自発的に集中して「聴く」という意味。

(注3) 蓮沼執太 — 音楽家(1983)。オーケストラを主宰するほか、多数の演劇や映像作品の音楽に関わるなど幅広く活動している。

(注4) シームレス — 境目を意識しないこと。元は「継ぎ目がない」ことを表す服飾用語。

問1

傍線部(ア)と(ウ)と同じ漢字を含む熟語を、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。

解答番号は、  
15  
17

(配点6点)

(ア) ヒゾク

15

- ① この山には遭難事故のセキヒがある。
- ② その案のサイヒを議論して決める。
- ③ ヒソウ的で浅薄なものの見方だ。
- ④ 子供向けにヒキンな例で説明する。
- ⑤ 機密情報をヒトクする。

(イ) オチイ

16

- ① 試合での華麗なシュートがアツカンだった。
- ② 重大なケツカンが見つかる。
- ③ 今度の不祥事はイカンなことだ。
- ④ 人工カンミ料で味をつける。
- ⑤ トンネルがカンツウする。

(ウ) コユウ

17

- ① 大企業にコヨウされる。
- ② わが国のコッコがうるおう。
- ③ コチョウした表現である。
- ④ コドクにさいなまれている。
- ⑤ 温度によりコタイに変化する。

## 問2

空欄

A

く

D

を補うのに最も適当なものを、次の①く⑧の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。ただし、同じ番号は一度しか選べない。解答番号は、A 、B 、C 、D 。

(配点8点)

- ① あるいは      ② たしかに      ③ すなわち      ④ でも  
⑤ さて      ⑥ もっとも      ⑦ というのは      ⑧ そのうえで

問3

空欄

X

解答番号は、

22

23

Y

を補うのに最も適当なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。

(配点4点)

X

22

- ① 聴覚の対象ではない
- ② 背景に追いやられる
- ③ 聴きたくもなくなる
- ④ 前面に押し出される
- ⑤ 急にざわつきはじめる

Y

23

- ① 実際の音よりことばのもつ意味を優先させる
- ② 聞こえたとおりの音をカタカナに置き換える
- ③ 鳥が本能的に訴えている思いをことばにしている
- ④ 音に忠実に表現するため言語の音の体系を崩す
- ⑤ 古代からの道徳的な教訓を今に伝えてくれる

## 問4

傍線部(1)「自らの語っていることがこういうふうを意識化され、身体化される」とあるが、どうということか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は、24。(配点5点)

- ① 留学生が自分の母語について考え、家族との会話に活用することで日本語の表現能力を高めることができたこと。
- ② 筆者が特定のことばを使わないことを留学生に指摘されて、自分のことばへのこだわりを認識し、改めたこと。
- ③ 学生が答案で筆者に講義の感想を伝える行為が、「聴く」を実践していることになると留学生在が気づいたこと。
- ④ 筆者が対面の講義で語ったことを留学生在が自らの体験を通して頭で理解し、体得し、実感するに至ったこと。
- ⑤ 留学生在が自分の気づきを書いて筆者に伝えた結果、理解の誤りを筆者から指摘されて日本語の理解を深めたこと。

## 問5

傍線部②「オノマトペはただそれだけで単独にあるのではなく、言語体系そのものなかでこそ生まれます」とあるが、ここでは「オノマトペ」についてどういうことを述べているか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は、25。(配点5点)

- ① 日本語と韓国語とで猫の鳴き声の言い方が違うように、同じ音を表すにしても一通りではなく世界に多彩なことがあある、ということ。
- ② 聞こえた音をそのまま表現するにしても、言語ごとに異なる音の体系に組み込まれた形でしかことばにならない、ということ。
- ③ 「ニャー」ということは、話し手と聞き手との間でそれが猫の声を表すものだと共通に理解されていないと伝わらない、ということ。
- ④ 動物の鳴き声のことばの体系に含めるのだから、表現する対象となる動物が存在しなければ成立し得ない表現法である、ということ。
- ⑤ 日本語では聞こえた音が音そのものとして表されるのではなく、言語体系のなかで意味のあることばとして生み出される、ということ。

## 問6

傍線部③「音楽の環境化が生じ常態化した」とあるが、どういふことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は、

26。

(配点5点)

- ① 音楽を「聞く」ことと「聴く」こととの間に明確な境界がなくなったことにより、個人個人が好みの消費のし方で音楽を楽しむ時代になった、ということ。
- ② 関連機器の発達と普及により、音楽を聴くのに高価な機材や公演チケットを買う必要がなくなり、音楽が大衆に身近なものになってきた、ということ。
- ③ 同じ音楽であってもそれをどのような環境で聴くのかによって聞こえ方が全く違うため、作り手もそれを考慮に入れた制作をする必要がある、ということ。
- ④ あらゆる場面で気軽に音楽を楽しめるようになり、音楽は存在を意識しない空気や水のようなものに変質し、誰もがそれなしで暮らせなくなった、ということ。
- ⑤ 音楽が意識的に聴くものから、常に耳に聞こえるもの、聞きながら何かをするものに変化し、それが普通のこととして定着してしまった、ということ。

## 問7

傍線部(4)「聴く、よりも聞くことをときに強調するべきかもしれない、と考えるようになった」とあるが、筆者はなぜそのように考えるに至ったのか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

解答番号は、27。

(配点6点)

- ① 意識して「聴く」ことと無意識に「聞く」こととは柔軟に行き来でき、人以外の動物は自在に「きく」行為をしていることから、集中して「聴く」という行為にほとんど意味がないことが、わかったから。
- ② 視線を一点に集中した状態では、周囲の音に鈍感になるために身に迫っている危険を察知することができず、生命の危機を招くおそれもあるため、常に聴覚は「聞く」姿勢を保つ必要がある、と気づいたから。
- ③ 集中して「聴く」ことは非常に疲れることであるうえ、その周囲のできごとや雰囲気などを聞き逃してしまうおそれがあるため、あらゆる方向に耳を向けてぼんやりと「聞く」こともまた大切だ、と感じられたから。
- ④ 一つのものだけを「聴く」ことにより、直接的な意味だけに理解が集中してしまい、自分と対象との間で相互的・相乗的に生じている雰囲気を知ることができないため、並行して「聞く」必要もある、と思ったから。
- ⑤ 意識的に一つの音を「聴く」という行為は、通常は音楽を聴くときのみすることで、日常では「聞く」ことが多いため、「聞く」ことについても、もっと考えないといけない、と考えたから。

## 問8

傍線部(5)「聴くにもつながってくる意志的なもの」とあるが、どういうことを指しているか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は、

28。

(配点6点)

- ① 自分が耳にした動物の鳴き声を他人に伝えるとき、意味のあることばになぞらえなければ相手に伝わらないため、積極的な意欲をもってなぞらえること。
- ② 自然の音は意図的に発せられるものではなく不意に偶然生じるものなので、それを認識するため全方位的に注意を払いつながりながら聞いている、ということ。
- ③ 偶然耳に聞こえてきた音であっても、それを言語の音に置き換えたり、さらにそこに意味を見いだしたりするというやり方で、受けいれようとする事。
- ④ 知らず知らず人間が行っているシームレスに「きく」ことの内実を明らかにするために、「聞く」ことと「聞こえる」ことをあえて分けて考えること。
- ⑤ 身のまわりにある音に対し自分の中で理解を深めるためには、その音を熱心に聴かなければならないため、集中して意識的にその音を聴こうとすること。

問9

本文の内容に合致するものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は、

29。

(配点5点)

- ① 留学生が独自に気づいた二種類の「きく」の違いである「こころ」について、集中度のことを指しているらしいと筆者は推測している。
- ② 留学生の家族が猫の鳴き声を「ニャー」と聞くことに違和感がなかったのは、オノマトペとして当然のことだ、と筆者は納得している。
- ③ バスや電車の中などの公共の場所で聴きたいものが聴ける今の世の中で、身勝手なマナーが定着してしまった、と筆者は感じている。
- ④ 音楽作品に関しては、意識的に集中して「聴く」ということが重要で、周辺の雰囲気に関わられるべきではない、と筆者は考えている。
- ⑤ 聞きなしの例がもっとも多いのが鳥の鳴き声であることは、人の生活における鳥の重要さから当然のことだ、と筆者は分析している。